

MACF礼拝説教要旨

2020.09.06

「賜物としての永遠のいのち」

ローマの信徒への手紙6章20-23節

**

6:20 あなたがたは、罪の奴隷であったときは、
義に対しては自由の身でした。

6:21 では、そのころ、どんな実りがありましたか。
あなたがたが今では恥ずかしいと思うものです。
それらの行き着くところは、死にほかならない。

6:22 あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴
隷となり、
聖なる生活の実を結んでいます。行き着くところ
は、永遠の命です。

6:23 罪が支払う報酬は死です。

しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・
イエスによる
永遠の命なのです。

+++

新改訳聖書による訳を見ると

6:20 罪の奴隷であった時は、あなたがたは義につ
いては、
自由にふるまっていました。

6:21 その当時、今ではあなたがたが恥じているそ
のようなものから、
何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行
き着く所は死です。

6:22 しかし今は、罪から解放されて神の奴隷とな
り、
聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永
遠のいのちです。

6:23 罪から来る報酬は死です。

しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリス
ト・イエスにある
永遠のいのちです。

++

パウロは読者に神を無視して、自分を神とし、自
分の価値判断を何より

大事に信じて生きていた頃の行動、行為を思い出
させようとしています。

その頃の行いから何か良いものが残ったか？

それらの行動が結果として祝福をもたらしたか？

答えは「否」です。それは恥ずべき行為であり、醜
態だったし、死を招く

行動だったのではないかとパウロは言うのです。

「善悪の知識の木の実を食べた」ことから人間が
ずっと心に持っている

利己的価値判断のもたらすものは、決して神の心
を満足させることはできません。

仮に「善意に満ちている」と自分で判断したとし
ても、神の目から見るとそれは醜悪な
自己顕示でしかなかったりするのです。

「罪の奴隷」とは「利己的価値判断による執着と
決断の奴隷」そして

「そこから生まれる高慢の奴隷」でもあります。
それらはすべて神の裁きと怒りの対象です。

神の怒りという言葉を使わなくても、行き着くこ
ころは「自己礼賛」であり

自分を神と等しくする発想です。神のいのちと真
逆の方向に向かわせる発想でも
あります。

イエス様が来てくださり、その十字架の出来事
により、すべての罪を担い

贖いの代価を支払ってくださったことにより、私
たちへの罪の裁きが完了し

私たちは「赦され」「新しい心で生きる」希望が
与えられました。

立場としては「罪の奴隷」ではなく「神の奴隷・
神のしもべ」としての
生き方が可能になりました。

私たちの肉体には、罪の傾向性は残っていますが
「赦され、生かされている

存在」として「神の喜びを喜びとし、神の悲しみ
を悲しみとつなげながら

生きる」存在となりました。

それはまさに「神のいのち」を味わいながら生き
る生き方なのだと言います。

それが「永遠のいのち」の道なのだと言うので
す。
罪はその行為、行動の「報い」として死が待っています。
キリストがその死を担ってくださったことを信じて
いる私たちにとっては
私たちの存在に対して「賜物」として「永遠のいのち」
が与えられているのだと
いうのです。

私たちの行為はすべて「死を招くような」ものばかり
だったのです。
しかし、イエス様がその死を担ってくださったので、
そんな行為の連続だったとしても「赦しをもたらされ」
賜物として「永遠のいのち」が備えられているのだと
いうのが福音です。

私たちの行動や行為がその報いとして「永遠のいのち」
を得るわけではないのです。
相変わらず「死をもたらすようなもの」が多いので
す。ところが神は、私たちに
憐み深く接して下さり、死をもたらすような私たちの
すべての罪を十字架で処理し、
赦しをもたらし、私たちの存在に対して「賜物」
を用意し「神のいのちを表現できる生き方」
に変えてくださいました。

今まで無駄だと思っていたような過去の歴史も、あんなに
醜悪だった自分の体験も
神の恵みを示すための出来事として理解できるような
「賜物」を与えてくださいました。
そこに提供されている賜物は「神による正当な自己肯定感」
です。
自分の出来事や行動を誇りとする自己肯定ではなく、
自分の行為も出来事もクズのようなものであったにもか
かわらず「生きていて良い」と神が言ってくださっている
とうなずける自己肯定感。

それは罪からの解放によってもたらされる大きな祝福
です。
神への賛美と、自分の行動や行為によるものでなく、
神の恵みによる正当な自己肯定感がもたらされる福音。
これは、まさに恵みの福音であり、キリストによっても
たらされる祝福の福音です。

私は、それこそ最近まで、自己肯定感を否定することが
謙遜につながるのではないかと、考えていたことがあり
ました。
ですから、自分は偉くもないし、本来は存在する必要
もないのだと考えることを土台にして生きることが大事
だと考えていました。でも、これは間違いだとわかり
ました。
自己肯定感の否定は謙遜ではありません。それは裏を
返せばかなり極端な傲慢です。
自分はこれだけ自分を否定して生きているということ
を察して欲しい心がいっぱいだからです。

永遠のいのちを賜物としていただいて生きている私
たちは、自分の行為や立派な行動による自己肯定感を
追い求める必要はありません。でも、神に生かされて
いるという意味での肯定感、神が生きなさいと言っ
て、力も必要も備えてくださっている人生を「感謝」し
「生きられて本当に嬉しい」と自分を肯定することは
とても大事です。そして、それこそ謙遜の土台です。
誰かに「いてくれてありがとう」と言われた時、そ
れを素直に喜べるかどうか、これはとても大事な
チェックポイントです。

自分は不必要、不出来ですと断定して、無理しながら
生きるという姿は見えて辛くなります。その人の頑張
りがはっきり見えてしまうからです。私たちは「神
が赦し、いのちの賜物を与えてくださっているの
で、不出来でも、不十分な面があっても喜んで
生きていて良いのだ」とうなずいてよいのです。

それによって「罪の奴隷からの解放と神の奴隷としての立場」が明確になってきます。

6:22 あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴隷となり、
聖なる生活の実を結んでいます。行き着くところは、永遠の命です。

6:23 罪が支払う報酬は死です。
しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる
永遠の命なのです。

神の命の中に生かされていることを実感し、自分の行為や出来事の誇りではなく
赦されている恵みを味わいつつ自分の存在を喜べる、という生き方こそ
永遠の命に生きる私たちの自覚の中心なのです。
祝福がありますように。